

愛媛大学教職大学院 研究発表大会2023
SESSION 2 課題研究報告〔第Ⅱ部〕
第7部会 学校・家庭・地域連携の教育効果

生存競争激戦区で考える公立普通科高校魅力化モデル

ー非認知能力を高める教育プログラムの開発ー

愛媛大学大学院
教育学研究科 教育実践高度化専攻
リーダーシップ開発コース 濱松 清司
指導教員 露口 健司・佐藤 栄治

本校は、B市（県庁所在地）に隣接するC町にある県立普通科高校である。B市内には多くの公立・私立高校があり、**生徒獲得競争の激戦区に位置する高校**である。

全校生徒数は、平成30年度の約900名から、今年度、450名程度となった。生徒数の大幅な減少は、**学力の低下、部活動の衰退など、深刻な問題を引き起こしている**。

今後、選ばれる学校となり、入学者数を回復させるためには、他校と差別化を図る**魅力化モデルを構築し、中学生や地域の人々に信頼される学校に生まれ変わる**必要がある。

「A 高校魅力化モデル」を提案することである。
そのために、非認知能力と学力、学校生活、教師の
関わりとの関係、中学生の高校魅力度を高める要因
を明らかにし、非認知能力を高める教育プログラム
を開発する。

非認知能力の定義：

認知しにくい力、すなわち試験のような機会を設けて点数化・数値化することが困難な力です。例えば、他者とコミュニケーションをとり協調や協働をするための力、自分自身で自らを勇気づけて挑戦や努力をするための力、自分の感情をコントロールして我慢や持続をするための力などのことを意味します。（中山2018.17）

社会情動的スキルの定義：

個人の成功と社会機能にとって重要な個人の能力や特性、性格の一部であり、態度の傾向や精神状態、作業への取り組み、行動や感情の管理及びコントロールを含む。
※OECD（経済協力開発機構）は「社会情動的スキル」として定義

高校魅力化の定義：

特定の授業や学習などの実践を指すのではなく、生徒が変化、成長する可能性を高める「学びの土壌」を豊かにするための検討、実践のプロセスのことである。
（喜多下 2019）

埼玉県学力学習状況調査報告書（令和3年度）

- 「主体的・対話的で深い学び」の実施に加えて、**良い学級経営が、学力や非認知能力を向上させ**、子供の学力向上につながっている。
- 学力や学習方略が伸びた子供は**教員との関係性が良い**傾向にある。
- 毎年毎年の子供のたちの非認知能力を高めることが**、学力の維持向上に重要である。
- 学級内における周囲との学力差は、学力と非認知能力の変容に影響する。
(埼玉県教育委員会ホームページ)

第1回OECD社会情動的スキル調査（SSES）報告書

- 社会情動的スキルは、**学校での成績を予測する有力な手がかり**となる。
- 知的好奇心と粘り強さ**は、よりよい学業成績と強い関連がある。
- 感情抑制が困難な生徒**は、他の生徒に比べて、**学業成績が低い**傾向にある。
- 実践と日々の体験を通して、スキルを伸ばしたり、強化したりできる学習環境の提供において、**学校が特に重要な役割を果たせる**。
(OECD2022)

学業不振に陥っている学生には単に知識を詰め込むような教育を行うのではなく、メタ認知の視点に立った指導も必要になってくる。

メタ認知能力は、社会や他者との関わりの中で獲得されるとされ、自力での獲得はきわめて難しいと考えられる。したがって、能力の育成には他者による介入は必須であると考察される。そのため、学内や臨床における様々な学習場面で言語的あるいは非言語的フィードバックを与え、それらを媒体に自己に対する適切なメタ認知能力を育成することが重要であると考察される。

(杉原他 2004)

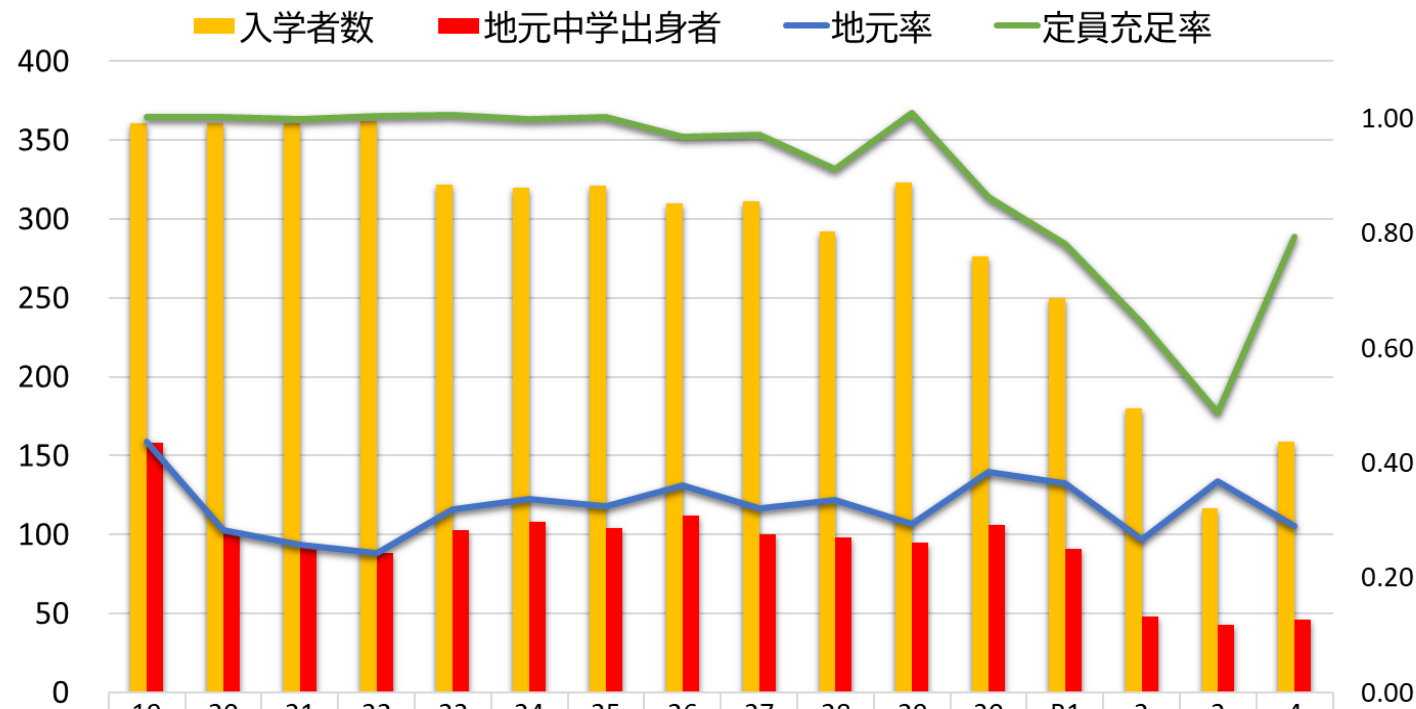
研究課題と研究実践内容

- 研究課題 1 生徒の学力と学習方略の習得は、非認知能力と関係があるのか。
- 研究課題 2 学校生活や教師の関わりは、生徒の非認知能力の伸長に影響を与えるのか。
- 研究課題 3 A 高校近隣区域の中学生は、高校の何に魅力を感じるのか。

【研究実践内容】

- ①データで探る A 高校入学者数減少の背景
- ②勉強と自分の内面に関する調査
- ③高校の魅力に関する意識調査

A高校入学者数・地元率・定員充足率の推移



	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	R1	2	3	4
入学者数	361	361	361	362	322	320	321	310	311	292	323	276	250	180	117	159
地元中学出身者	158	102	93	88	103	108	104	112	100	98	95	106	91	48	43	46
地元率	0.44	0.28	0.26	0.24	0.32	0.34	0.32	0.36	0.32	0.34	0.29	0.38	0.36	0.27	0.37	0.29
定員充足率	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	0.97	0.97	0.91	1.01	0.86	0.78	0.64	0.49	0.80

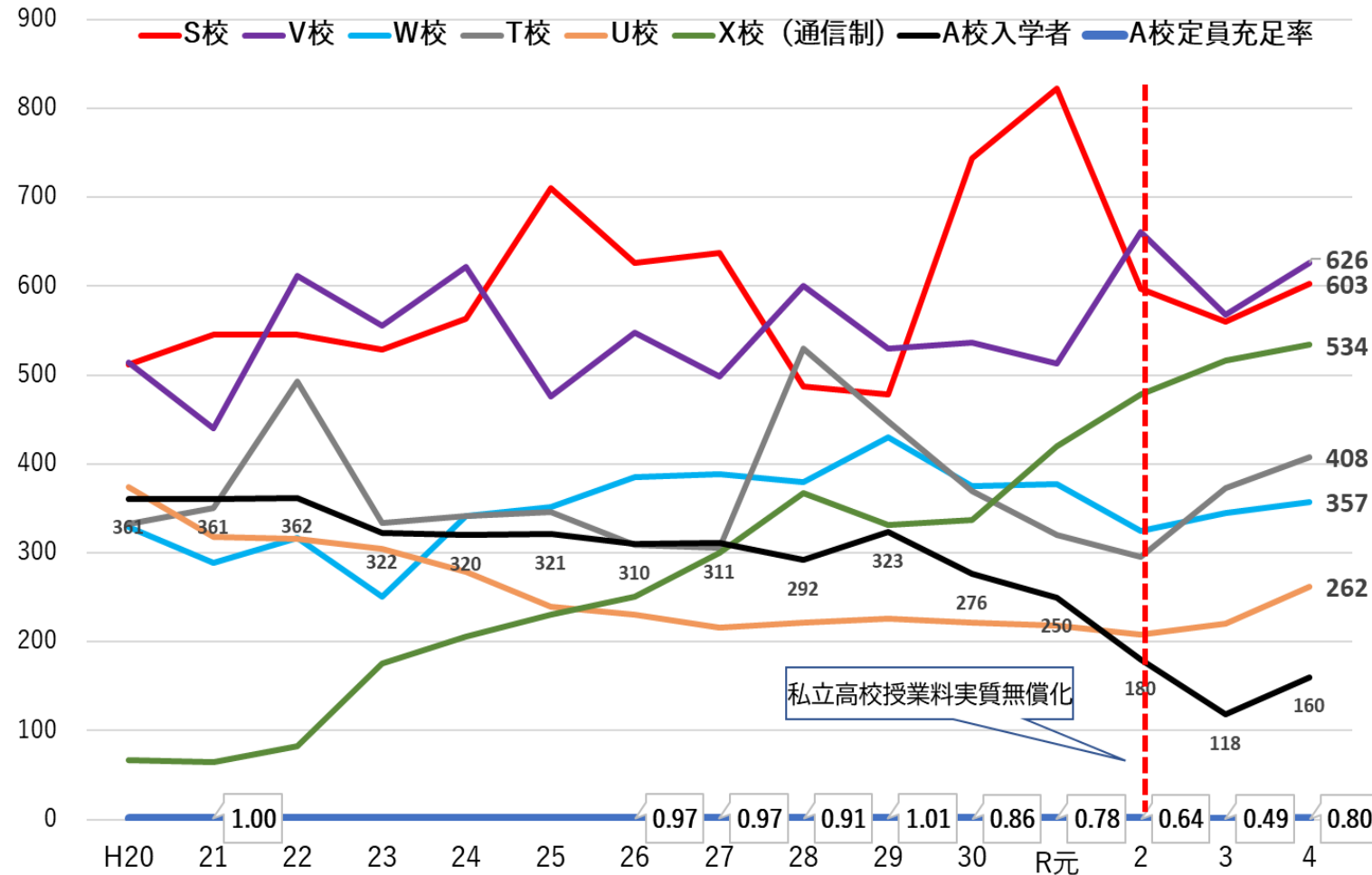
■ H20年度から地元率が40%を割る。

■ H26年度から定員割れが始まる。

■ 急速な定員割れはH30年度から。

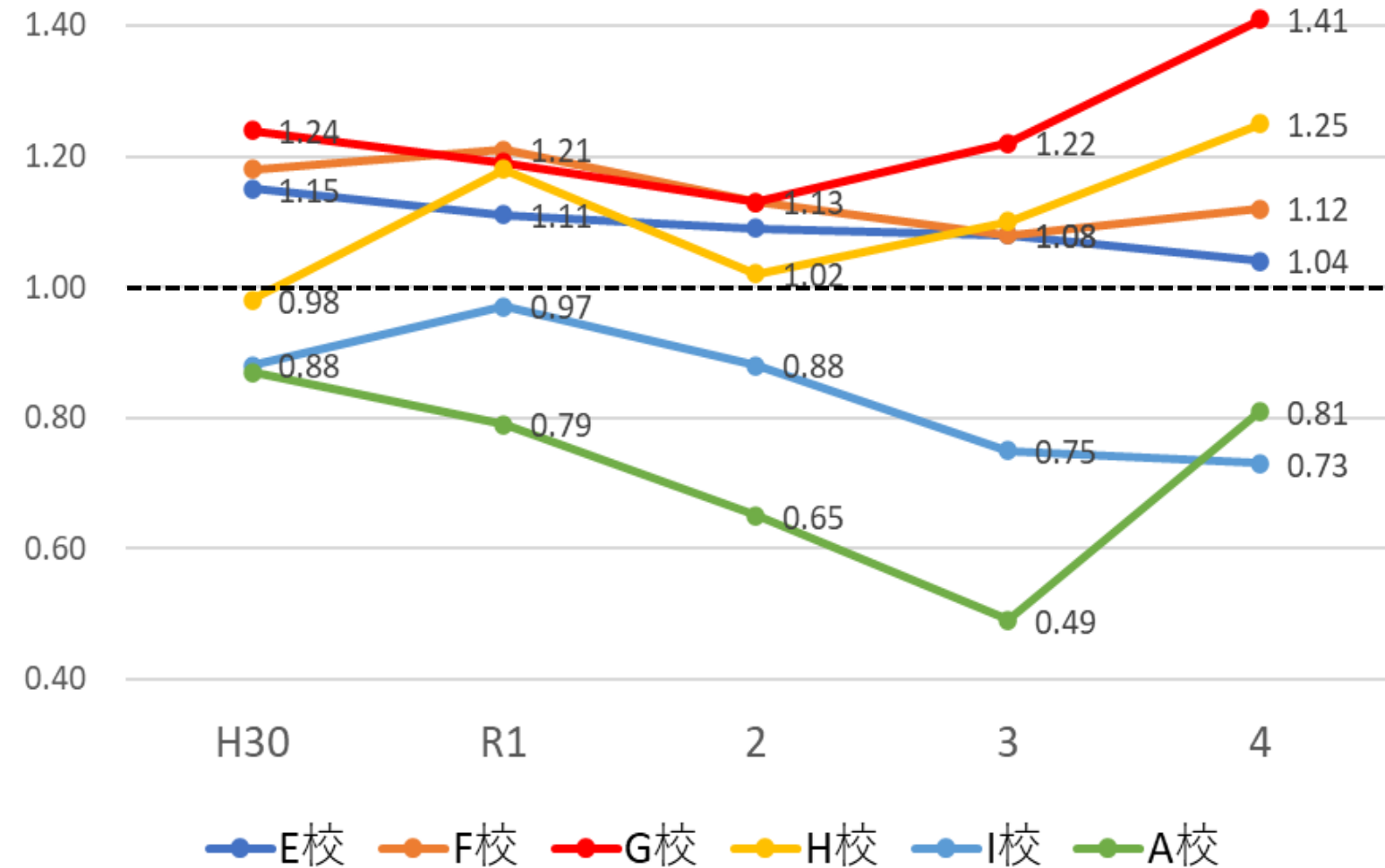
■ 地元・B市両方からの入学者数減少が、大幅な定員充足率の低下につながっている。

B市内私立高校入学者数推移



- A高校の大幅な定員割れはH30年度から。
- S高校の入学者数はH30年度に744名。R元年度には過去最多の823名。
- 授業料実質無償化が始まるR2年度からは、これまで微減であったW・T・U高校で入学者数が増加。
- 私立高校入学者数の増加は、A高校の入学者数減少に大きな影響を与えている。

B市内県立普通科高校志願倍率比較



- 直近5年間のB市内県立普通科高校の志願倍率は、軒並み定員数を超えている。
- 私立高校人気の高まりは、すべての県立高校に影響を与えているわけではない。
- B市及び近郊地域で、A高校が選ばれない学校になっている。

- 調査対象：A 高等学校全校生徒（434サンプル 回答率96.4%）
 - 1 年生（151：男72 女79） 2 年生（110：男57 女53）
 - 3 年生（173：男64 女109）
- 調査時期：2022年9月
- 調査方法：Microsoft Formsによるアンケート調査
- 調査内容：
 - ・学習方略に係る24項目
 - ・非認知能力に係る41項目
 - ・学校生活に係る9項目

※埼玉県学力学習状況調査による（資料1）

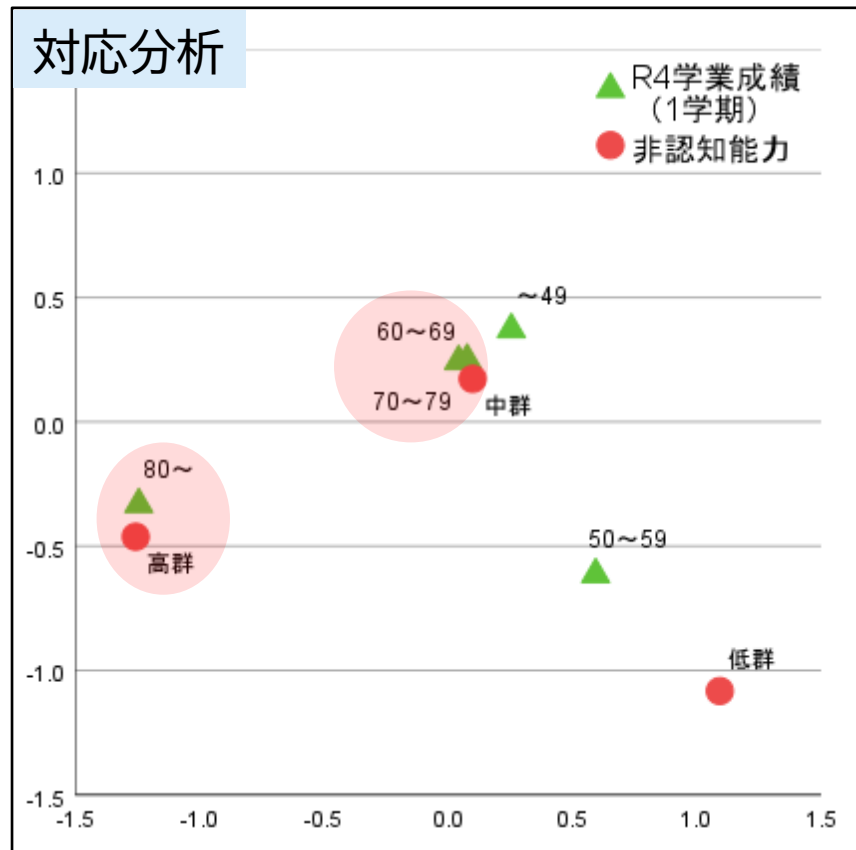
■アンケート結果の数値化

- ・ 5件法：4（よく当てはまる）～0（まったく当てはまらない）
- ・ 非認知能力：「**自制心・自己効力感・勤勉性・やり抜く力**」に係る項目の総平均値
- ・ 三群の設定：高群（2.8～4）中群（1.6～2.8未満）低群（1.6未満）
- ・ 学力の指標：令和4年度1学期学業成績
5（80以上～100）4（70以上～80未満）3（60以上～70未満）2（50以上～60未満）1（50未満）

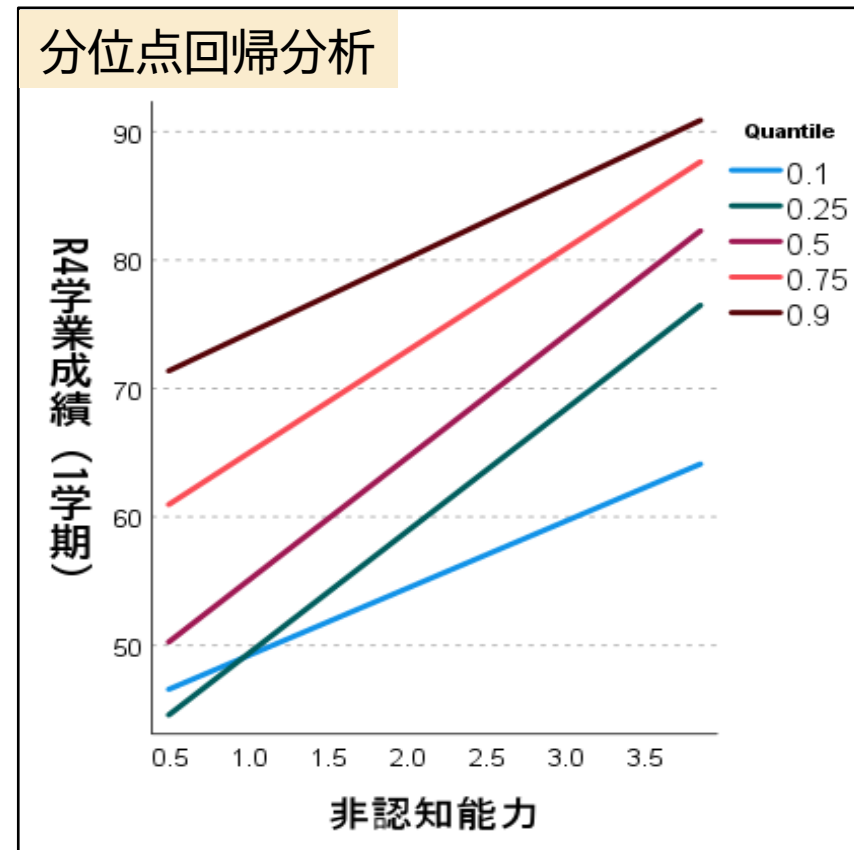
■分析方法

- ・ 分析ソフト：**SPSS(IBM)**
- ・ 分析手法
 - 対応（コレスポンデンス）分析**
（理由）項目の多い調査において、項目間の関係性を視覚的に分かりやすく表現できるため、教職員の理解を得られる。
 - 分位点回帰分析**
（理由）説明変数に対する被説明変数の変化を予測し、グラフ化することができるため、学力層別の問題点と対策を考えるヒントを得られる。

1 学業成績×非認知能力



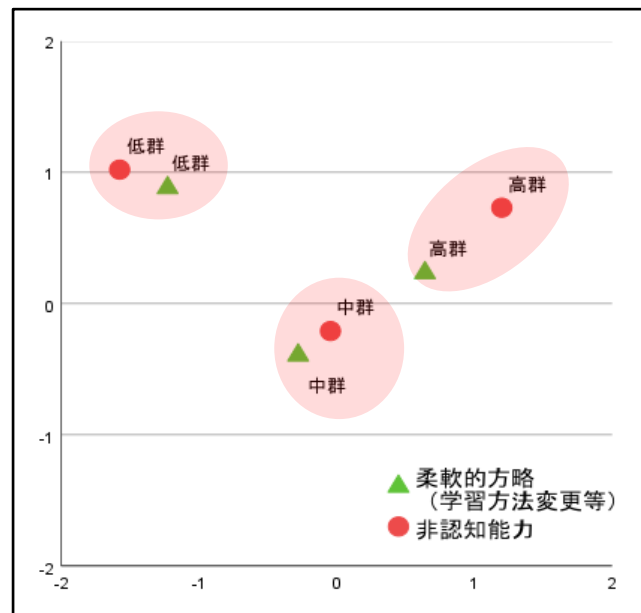
2 学業成績×非認知能力



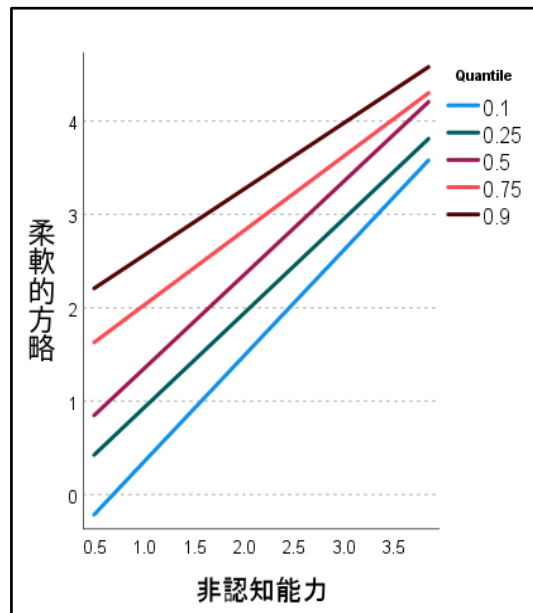
■学業成績と非認知能力には相関がある。

■非認知能力の向上が、各分位点の生徒の学力を高めことを予測。

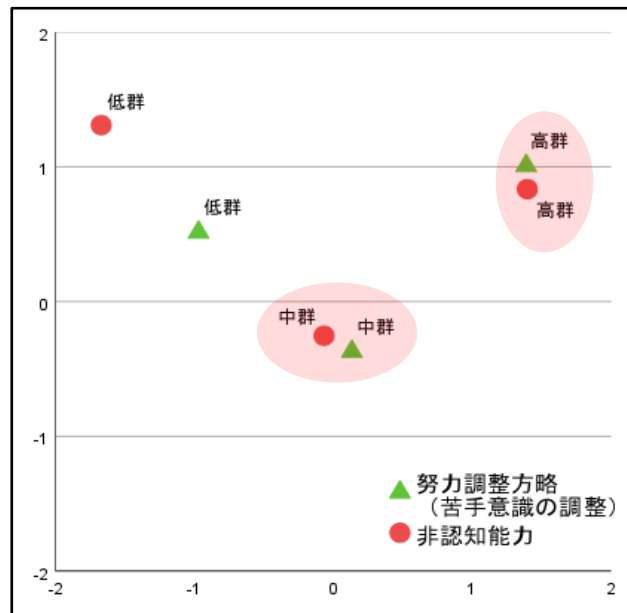
1 柔軟の方略×非認知能力



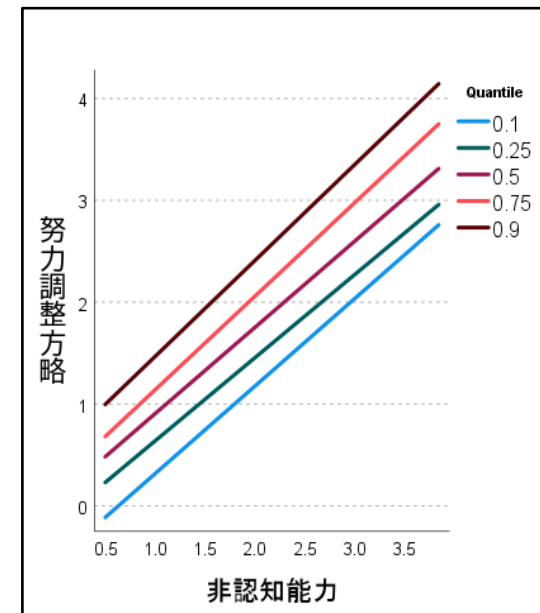
2 柔軟の方略×非認知能力



3 努力調整方略×非認知能力

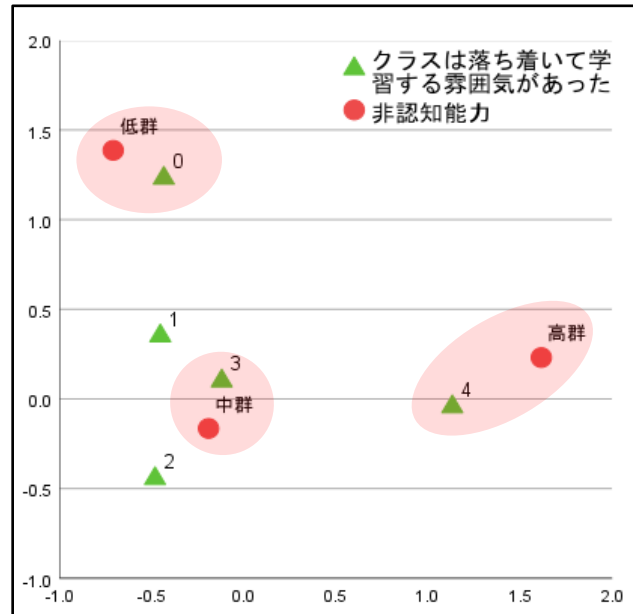


4 努力調整方略×非認知能力

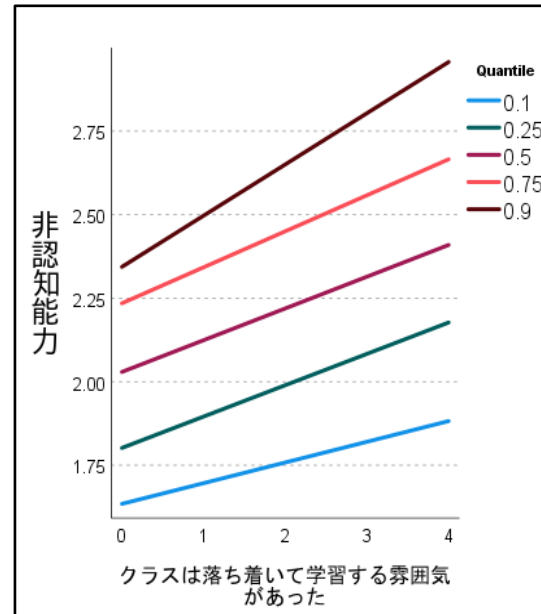


- 非認知能力と学習方略の習得には、強い相関がある。
- 非認知能力の向上が学習方略の習得を高めることを予測。

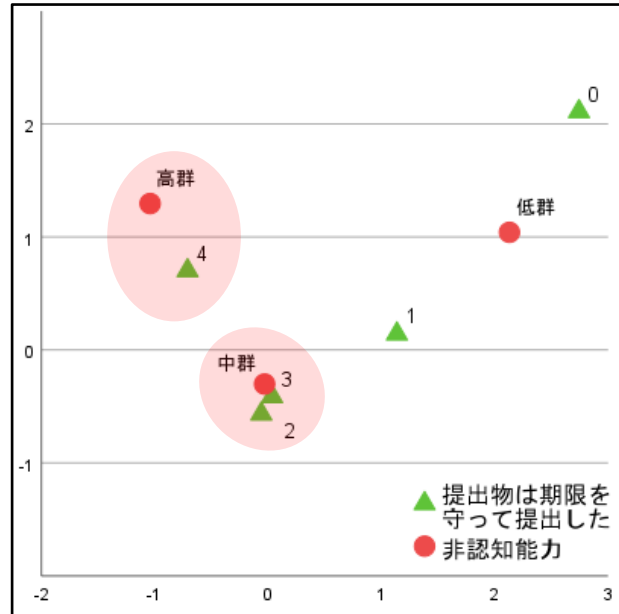
1 学習環境×非認知能力



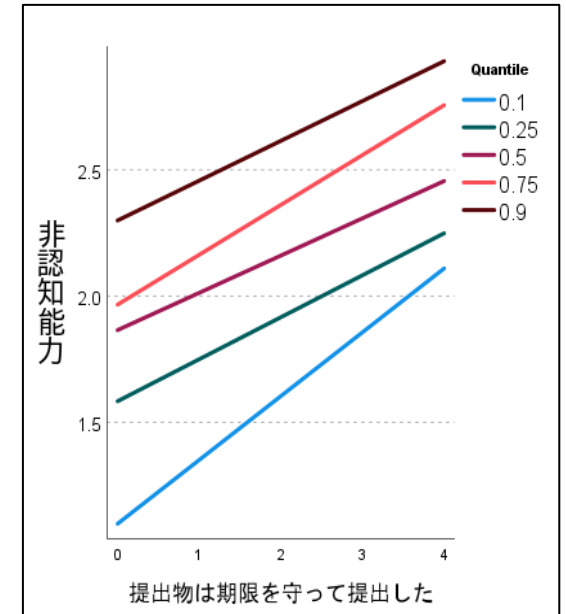
2 学習環境×非認知能力



3 クラス規範×非認知能力

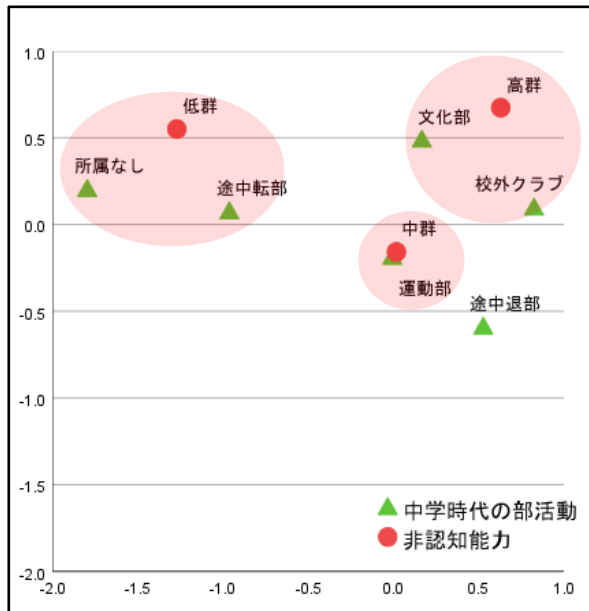


4 クラス規範×非認知能力

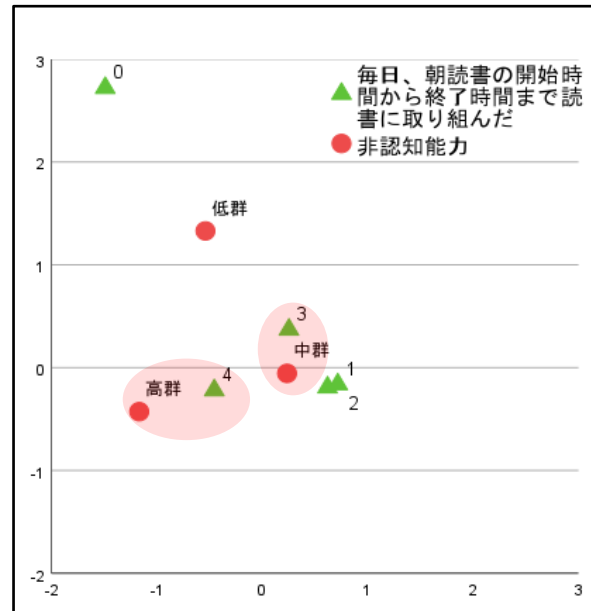


■ 落ち着いて学習できる環境作り、提出物の期限厳守の徹底は、生徒の非認知能力を向上させることを予測。

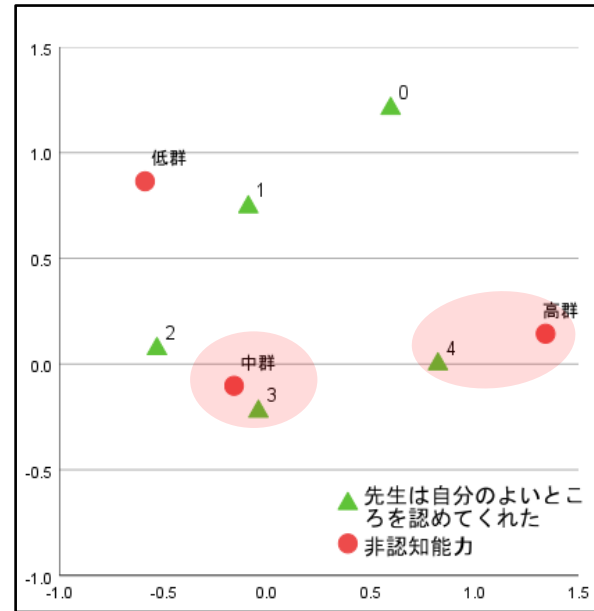
1 部活動×非認知能力



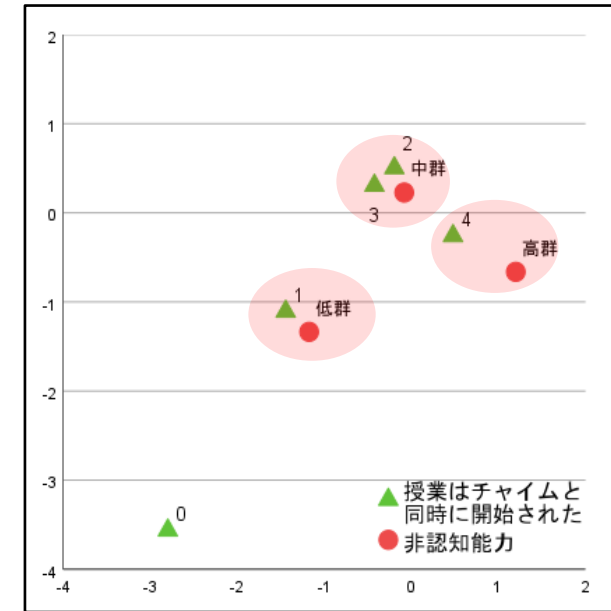
2 朝読書×非認知能力



3 先生の称賛×非認知能力



4 授業規範×非認知能力



■ 学校生活（朝読書、部活動等）や教師の関わり（声かけ、規範作り）は、非認知能力と相関がある。

研究課題1：生徒の学力と学習方略の習得は、非認知能力と相関があるのか。

結果：学力と学習方略の習得は、非認知能力と強い相関がある。

研究課題2：学校生活や教師の関わりは、生徒の非認知能力の伸長に影響を与えるのか。

結果：学校生活や教師の関わりは、非認知能力の伸長に影響を与える。

but

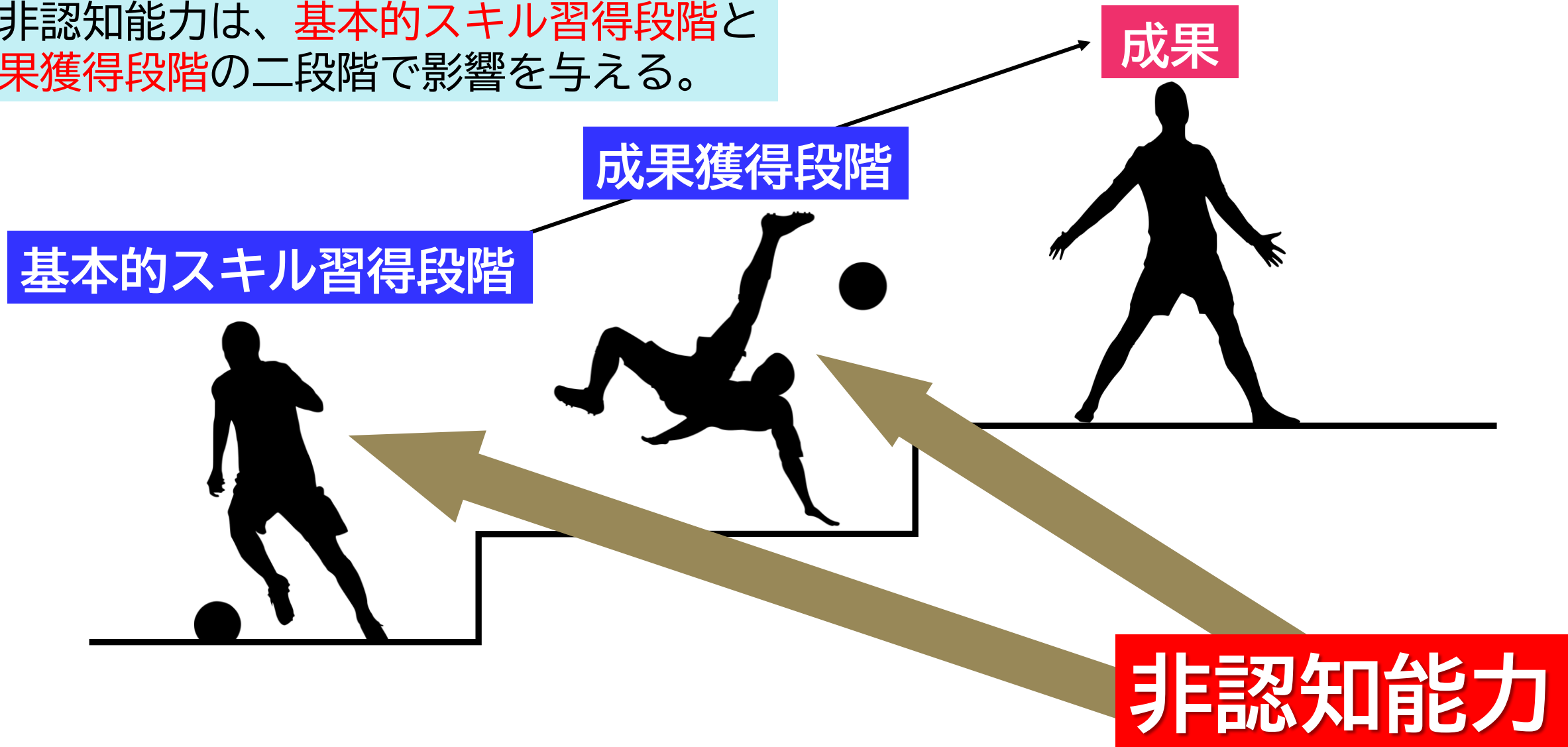
学習方略を習得しても、学業成績が低位層に留まっている生徒も存在する。

なぜ、身に付けたスキルを成果につなげることができていないのか？

コレスポネンス テーブル

R4学業成績（1学期）	柔軟的方略（学習方法変更等）			
	低群	中群	高群	周辺
～49	9	13	9	31
50～59	13	55	20	88
60～69	16	79	55	150
70～79	7	46	51	104
80～	1	16	44	61
周辺	46	209	179	434

非認知能力は、**基本的スキル習得段階**と**成果獲得段階**の二段階で影響を与える。



非認知能力4項目と学業成績・学習方略の習得の相関係数

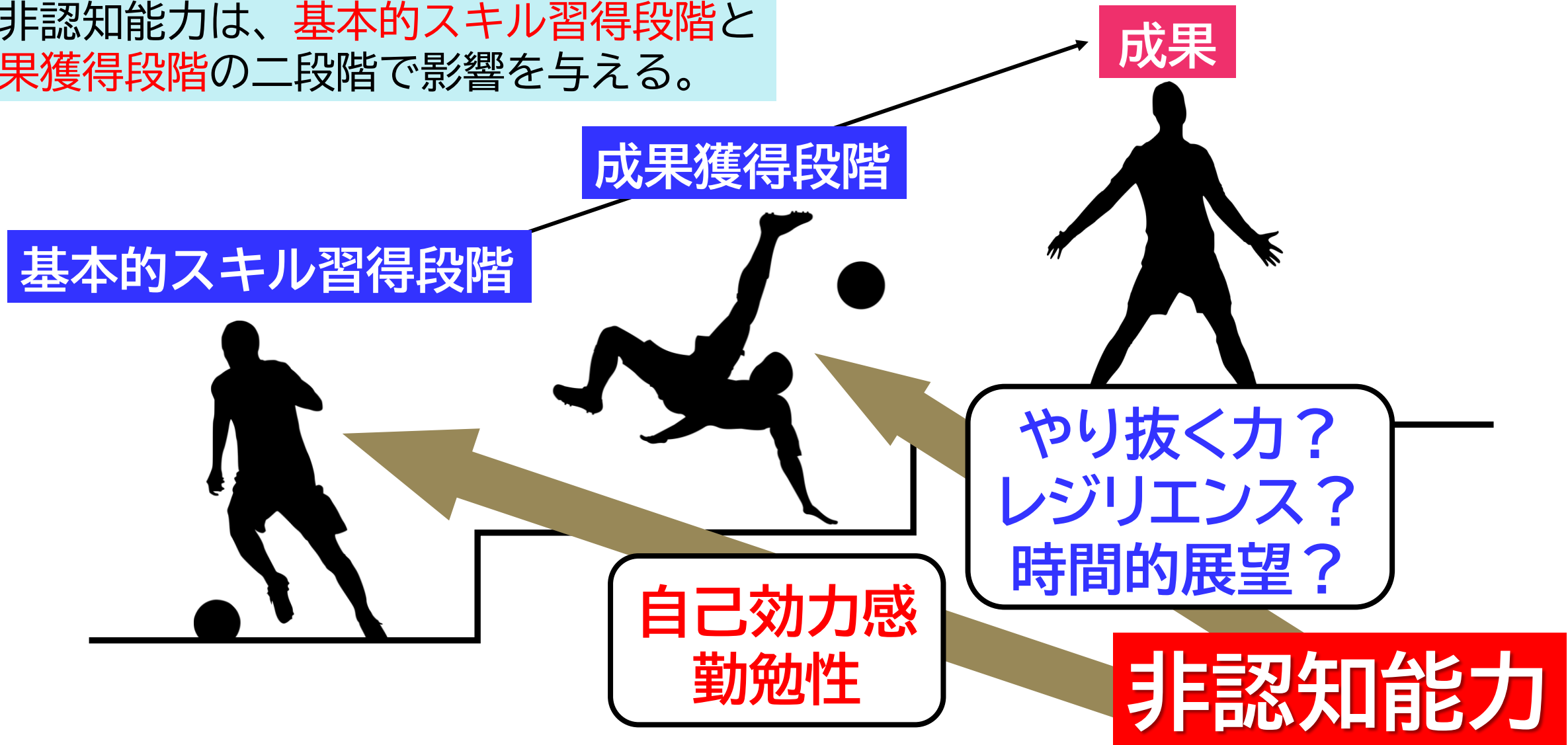
	学業成績	柔軟的方略	プランニング 方略	作業方略	人的リソース 方略	認知的方略	努力調整方略
自制心	.244**	.159**	.172**	.238**	.115**	.083**	.342**
自己効力感	.391**	.579**	.504**	.466**	.297**	.571**	.505**
勤勉性	.295**	.567**	.536**	.585**	.407**	.518**	.532**
やり抜く力	.170**	.304**	.293**	.319**	.186**	.295**	.496**

注) **P<0.01 N=434

■学習方略の習得に比べ、学業成績との相関は弱まる。

■高い学業成績を収めるためには、より高次元かつ他の非認知能力が必要となる。

非認知能力は、**基本的スキル習得段階**と**成果獲得段階**の二段階で影響を与える。



調査対象 : 中学3年生 (738サンプル 回答率約65%)

※地元5中学校 (C町3校、D市2校)、B市内3中学校

時期及び方法 : 2022年9月 Googleフォームによるアンケート調査

調査内容 : 7件法 6 (非常に魅力を感じる) ~ 0 (まったく魅力を感じない)

- ・ 立地環境・施設・設備に係る7項目
- ・ 学力・進路保障に係る12項目
- ・ 部活動に係る13項目
- ・ 校則・校風・その他に係る18項目

分析ソフト : SPSS (IBM)

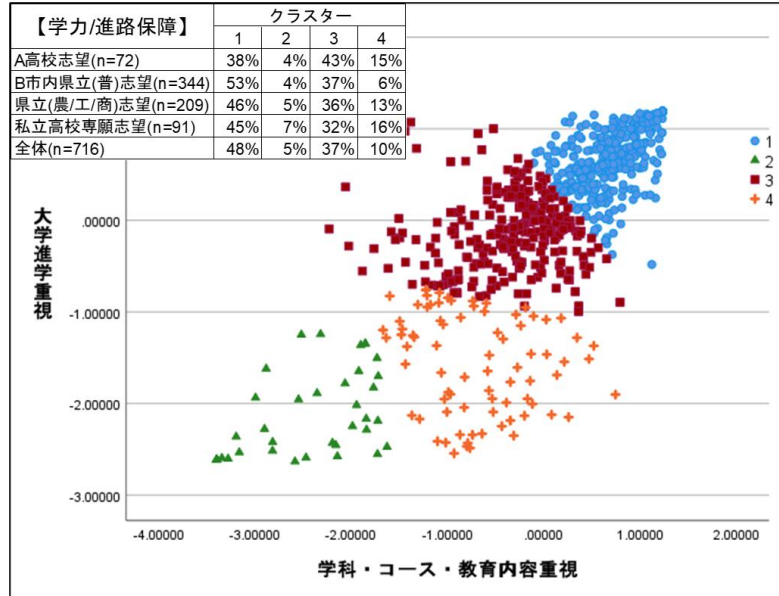
分析手法 : クラスター分析

(理由) 複数の類似したデータを集約して扱うことができ、各クラスターの特性を分析するだけでおおまかな特性を把握できるため。



「高校の魅力に関する意識調査」

1 大学進学×学科・コース・教育内容



■ A高校志望者

大学進学意欲がやや低いが、学科やコースを重視する傾向。

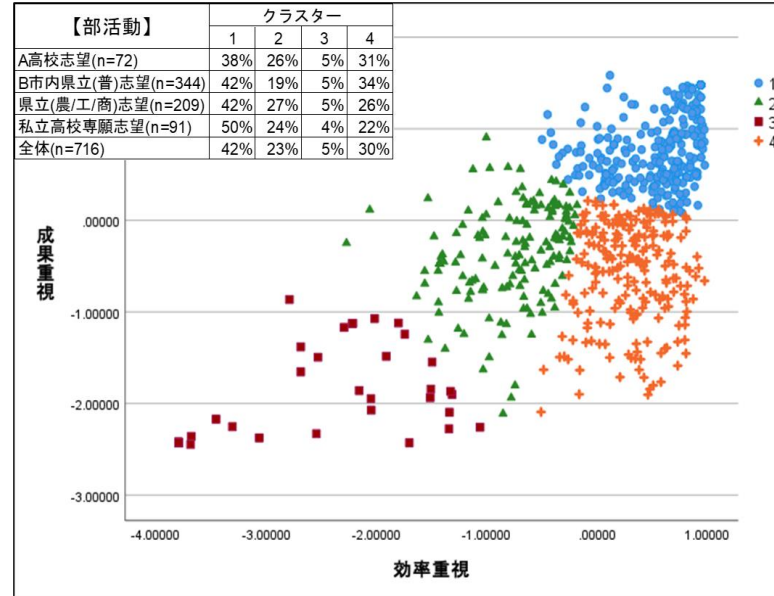
■ B市内県立高校（普通科）志望者

大学進学を明確な目標にし、高校選択は**進学実績を重視**。

■ 私立高校専願志望者

大学進学への意識が高く、学科やコースの特色も重視。

2 成果重視×効率重視



■ A高校志望者

部活動への意欲がやや低い傾向。

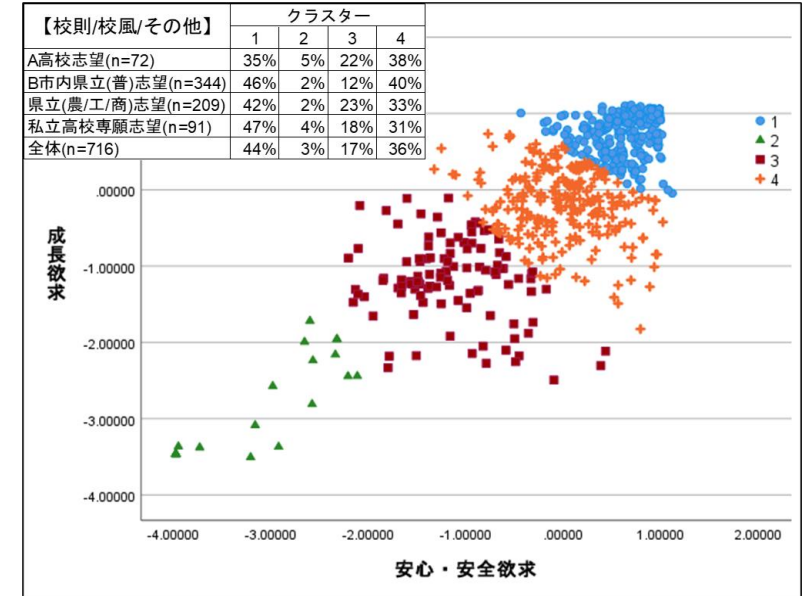
■ B市内県立高校（普通科）志望者

部活動への意欲は高いが、**自主性尊重**を求め、**長時間の拘束や休養日が少ない環境**を望まない傾向。

■ 私立高校専願志望者

成果を重視し、**部活動中心の高校生活**をイメージしている割合が高い。

3 成長欲求×安心・安全欲求



■ A高校志望者

自己成長への期待感はやや低いが、安心・安全な環境を求める傾向。

■ B市内県立高校（普通科）志望者

自己成長、学習環境ともに、高校生活への**期待感が高い**。

■ 私立高校専願志望者

自己成長、学習環境への期待感が**高低二極化**の傾向。

「勉強と自分の内面に関する調査」からの示唆

- 非認知能力の向上は、A高生の学力を高める可能性がある。
- 非認知能力の伸長に、教室の環境づくりや規範づくりが重要な意味を持つ。
- 積極的なフィードバックが生徒との信頼関係を醸成し、非認知能力を高める。
- 学業成績を高めるためには、内発的または外発的動機付けとなる非認知能力が必要である。

「高校の魅力に関する意識調査」からの示唆

- 進学実績は生徒の高校選択を左右する、重要な要素である。
- 多くの生徒にとって、部活動は高校生活のハイライトになる。
- やらされる部活動を望まない生徒が増加している。
- 多くの生徒が、高校生活における感動と成長の機会を求めている。

A 高校魅力化モデル

進路実現率向上

自己効力感

レジリエンス

自己有用感

時間的展望

やり抜く力

批判的思考

好奇心

創造性

プログラム1 フィードバックタイム for class



■ ケース：学級経営

■ 内 容

- ・ 毎週金曜日SHR
- ・ 一週間の振り返り
- ・ ポジティブ・フィードバック
- ・ 頑張りとお意にフォーカス

プログラム2 貢献型探究活動（CBL）

Contribution
Based
Learning



■ ケース：総合的な探究の時間

■ 内 容

- ・ 社会貢献、自校貢献から学ぶ
- ・ 「RQ・成果物・成果発表」
→ 生徒個々の課題に
- ・ 感謝される体験→有能感醸成

プログラム3 マルチエントリー型部活動



■ ケース：部活動

■ 内 容

- ・ 運動部への複数登録
- ・ 自ら練習計画を立案・調整
- ・ 部活動運営をボトムアップ型へシフト

○今年度

生徒の非認知能力を高める教育プログラムの開発



「A高校魅力化モデル」を提案

○来年度

- ・ A高校魅力化モデルの実践
- ・ 生徒の学力、非認知能力の変容を調査・分析

引用・参考文献

Angela Duckworth(2016)『やり抜く力GRIT(グリット)－人生のあらゆる成功を決める「究極の能力」を身につける』ダイヤモンド社

小塩真司(2021)『非認知能力－概念・測定と教育の可能性－』

神谷拓(2018)『部活動学－子どもが主体のよりよいクラブをつくる24の視点－』ベースボールマガジン社

喜多下悠貴(2019)『高校魅力化の評価 地域・教育魅力化プラットフォーム 地域協働による高校魅力化ガイド』岩波書店

久我直人(2019)『潤いのある学級・学校づくりの理論と実践』ふくろう出版

杉原敏道・有馬慶美・郷貴大・三島誠一・小川恵一・武田貴好(2004)メタ認知が学力に与える影響

経済協力開発機構(OECD)(2022)『社会情動的スキルの国際比較 教科の学びを超える力(第1回OECD社会情動的スキル調査(SSES)報告書』明石書店

埼玉県教育委員会(2021)令和3年度埼玉県学力学習状況調査報告書(令和4年1月)

<https://www.pref.saitama.lg.jp/f2214/gakutyuu/20150605.html> (最終アクセス日2022年11月20日)

露口健司(2016)『ソーシャル・キャピタルと教育』ミネルヴァ書房

中山芳一(2020)『非認知能力を伸ばすコツ』東京書籍

Paul Tough(2017)『私たちは子どもに何ができるのか－非認知能力を育み、格差に挑む－』英治出版

「勉強と自分の内面に関する調査」：学習方略の習得に関する項目

柔軟的方略（自分の状況に合わせて学習方法を柔軟に変更していく）	人的リソース方略（友人を利用して学習を進める活動）
勉強のやり方が、自分にあっているかどうか考えながら勉強する	勉強でわからないところがあったら、友人にその答えを聞く
勉強でわからないところがあったら、勉強のやり方をいろいろ変えてみる	勉強でわからないところがあったら、友人に勉強のやり方を聞く
勉強しているときに、やった内容を覚えているかどうか確かめる	勉強のできる友人と、同じやり方で勉強する
勉強する前に、これから何を勉強しなければならないかについて考える	勉強するときは、最後に友人と答え合わせをするようにする
プランニング方略（計画的に学習に取り組む活動）	認知的方略（より自分の理解度を深めるような学習活動）
勉強するときは、最初に計画を立ててから始める	勉強するときは、内容を頭に思い浮かべながら考える
勉強しているときに、やっていることが正しくできている（正解している）かどうかを確かめる	勉強をするときは、内容を自分の知っている言葉に置き換えて理解するようにする
勉強するときは、自分で決めた計画に沿って行う	勉強していてわからないところがあったら、先生に聞く
勉強しているとき、たまに止まって、一度やったところを見直す	新しいことを勉強するとき、今までに勉強したことと関係があるかどうかを考えながら勉強する
作業方略（ノートに書く、声に出すなど、作業を中心に学習を進める活動）	努力調整方略（「苦手」などの感情をコントロールして意欲を高める活動）
勉強するときは、参考書や辞典などがすぐに使えるように準備しておく	学校の勉強をしているとき、とても面倒でつまらないと思うことがよくあるので、やろうとしていたことを終える前にやめてしまう
勉強する前に、勉強に必要な本（教科書）などを用意してから勉強するようにしている	今やっていることが気に入らなかったとしても、学校の勉強でよい成績をとるために一生懸命頑張る
勉強していて大切だと思ったところは、言われなくてもノートにまとめる	授業の内容が難しいときは、やらずにあきらめるか簡単なところだけ勉強する
勉強で大切なところは、繰り返して書いたりして覚える	問題が退屈でつまらないときでも、それが終わるまでなんとかやり続けられるように努力する

出典：心理測定尺度集Ⅳ：子どもの発達を支える〈対人関係・適応〉，(2007).，心理測定尺度集/堀洋道監修.サイエンス社

資料 1 - 2

「勉強と自分の内面に関する調査」：非認知能力を調査する項目

自制心	授業で必要なものを忘れた	自己効力感	授業ではよい評価をもらえるだろうと信じている
	他の生徒が話をしているときに、その生徒の邪魔をした		教科書の中で一番難しい問題も理解できると思う
	何か乱暴なことを言った		授業で教えてもらった基本的なことは理解できると思う
	机・ロッカー・部屋が散らかっていたので、必要なものを見つけることができなかった		先生が出した一番難しい問題も理解できると思う
	家や学校で頭にきて人やモノにあたった		学校の宿題や試験でよい成績をとることができると思う
	先生が、自分に対して言っていたことを思い出すことができなかった		通知表でよい成績をとることができるだろうと思う
	きちんと話を聞かないといけないうちにぼんやりしていた		授業で教えてもらったことは使いこなせると思う
	イライラしているときに、先生や家の人（兄弟姉妹を除く）に口答えをした		授業の難しさ、先生のこと、自分の実力のことなどを考えれば、自分はよくやっているほうだと思う
出典: Tsukayama,E.,Duckworth,A,L.,&Kim,B.(2013). Domain-specific impulsivity in school-age children. Developmental Science,16,879-893		出典: P.pintrich,et al.(1991) A Manual for the Use of the Motivated Strategies for Learning Questionnaire(MSLQ)	
勤勉性	うっかりまちがえたりミスしたりしないように、やるべきことをやります	やり抜く力	大きな課題をやり遂げるために、失敗を乗り越えてきました
	ものごとは楽しみながら頑張る		新しい考えや計画を思いつくと、前のことから気がそれてしまうことがあります
	自分がやるべきことにはきちんと関わる		興味を持っていることや関心のあることは、毎年変わります
	授業中は自分がやっていることに集中する		失敗しても、やる気がなくなってしまうことはありません
	宿題が終わったとき、ちゃんとできたかどうか何度も確認をする		少しの間、ある考えや計画のことで頭がいっぱいになっても、しばらくすると飽きてしまいます
	ルールや順番は守る		何事にもよく頑張るほうです
	誰かと約束をしたら、それを守る		いったん目標を決めてから、その後別の目標に変えることがよくあります
	自分の部屋や机の周りは散らかっている		終わるまでに何カ月もかかるようなことに集中し続けることができません
	何かを始めたら、絶対終わらせなければならない		始めたことは何でも最後まで終わらせます
	学校で使うものはきちんと整理しておくほうである		何年かかるような目標をやり遂げてきました
	宿題を終わらせてから遊ぶ		数カ月ごとに、新しいことに興味を持ちます
	気が散ってしまうことはあまりない		まじめにコツコツとやるタイプです
	やらないといけないうちはきちんとやる		
出典: Barbaranelli, C., Caprara, G. V., Rabasca, A., & Pastorelli, C.(2003). A questionnaire for measuring the Big Five in late childhood. Personality and Individual Differences.34(4).645-664		出典: Duckworth, A. L., Peterson, C., Matthews, M, D., & Kelly, D. R.(2007).Grit: Perseverance and passion for long-term goals. Journal of Personality and Social Psychology, 92(6), 1087-1101.	

報告は以上です。
ご意見、ご助言をお願い致します。